

2022年度 トコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/29

団体名	NPO法人子どもパートナーズHUGっこ	活動タイトル	生きづらさを抱える子どもの学びとソーシャルスキル支援事業「わくわくクラブ」	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景	
● 地域の望ましい社会状況(ビジョン)	<p>子どもは、環境や特性に関係なく深く尊重され、子ども自身が主体的に生き抜く力を身につけることが望まれる。また、家庭や学校だけでなく地域社会全体が子どもの育ちと子ども自身に対し、理解と共感を示し、地域ぐるみで子どもを見守る社会の醸成は必須である。と同時に特別なニーズのある子どもに対しては専門的知識とスキルを持った専門職の関わりも必要となる。</p> <p>一人ひとりすべての子どもがその権利を保障され、生き生きと社会の中で生きていくことのできるあたたかい地域社会、対立ではなく対話が重視される社会の実現をめざす。</p>		<p>2023.2 「真冬の集団遊び」</p> 	
● 団体の社会的役割 (ミッション)	<p>当団体のミッションは一言でいえば「子どもの育ち、子育てを核とした持続可能なインクルーシブな社会の醸成」である。</p> <p>そのために、福祉と教育の視点とスキルを持ち、常に研鑽を重ねながら、妊娠前から青年期までの切れ目のない発達支援と子育て支援事業を実践する。また、地域社会が従来の子ども観や子育ての常識に捉われず、子どもの権利を核としながら、対話を重ねお互いにエンパワメントしあえる関係を築いていくことの重要性についても情報発信し続けることも当団体のミッションと認識している。</p>			
● 団体の活動基盤	<p>● 人材育成・確保：</p> <p>1) 子どもの育ちや発達を丁寧に捉え、共感的に子どもや保護者に向き合うことのできる地域人材、学生スタッフ等若者の育成と確保</p> <p>2) 広い視野と知見を持ち自ら研鑽を重ねる専門職スタッフの確保 3) 団体を評価できるスーパーバイザ</p> <p>● 活動資金：持続可能な自主事業を通して得られる自己資金。当団体の趣旨に賛同する企業、団体、個人からの寄付。ミッションを実現できる行政からの委託事業（連携事業）</p> <p>● ナレッジ：当団体の事業の中で培った知見や知識、おもいを形にして、人材育成マニュアルを作成、また学校、家庭、地域社会に対して、実践記録をエビデンスとした持続可能なインクルーシブな社会への理解と共感を促す報告書、マニュアルを形にする。</p>			
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
<p>1.日時：毎週土曜日午前中及び午後 年間61回実施</p> <p>2.場所：地域の集会所及び近隣の公園他</p> <p>3.対象：小学1年生～5年生とその家庭、22名</p> <p>4.内容：学習支援、遊びや集団活動を通したソーシャルスキル支援、体験活動、食品支援</p> <p>5.スタッフ：特別支援教育教員、学童コンサル、作業療法士、地域住民、大学生</p> <p>6.活動の特色：活動3年目となる本年は、2年間の検証から子ども達だけでなく保護者にとっても野外での体験活動が非常に意義あるものとなること判明。他機関や団体と連携し保護者を巻き込みながら、芋堀り、BBQ、宿泊体験などを実施。「子どものQOL尺度」調査結果やアンケート結果から子ども達だけでなく保護者のwell-beingの向上につながったと確信している。また、他校区からのニーズも複数あり、当初の計画にはなかったが、夏休みに3校区目の校区で本活動を実施。想定以上の参加があり継続希望の声があがった。何よりもまず子どもの声を受け止める受容と傾聴の姿勢を大切に子どもが本来持っている好奇心と主体性を引き出すことができた1年間となった。</p>		<p>1.保護者のみの交流を目的とした活動よりも、保護者が子どもとの体験活動に参加することで保護者同士の交流が生まれ、またスタッフとのかわりも深くなっていくことを実感した。また、Googleフォームでのアンケートが回答しやすいと好評で多くの声寄せられた。</p> <p>2.必要なケースでは学校の支援級・通級の先生とも協議をし個別のニーズに沿った学習支援ができた。また、3年間の積み重ねで、本事業独自の学習プリントを作成。マニュアル化することができ子どもの学習意欲の醸成にもつながったことで苦手意識を克服できた児童もでてきた。</p> <p>3.コミュニケーションに不安があったり自閉傾向のある児童にスタッフがコーディネートすることで集団遊びに参加できるようになったり、できなかったことにチャレンジしたり、最後には宿泊キャンプにも参加して子ども自身のwell-beingが向上したケースがいくつもあった。</p> <p>4.これらの活動を通して、子どものQOL尺度はほぼ全員がアップ、100%の子どもと保護者が来期も本事業への参加を希望している。また子どもや保護者のポジティブな変化に出会えたスタッフ自身も本事業に意義を感じており事業の継続と発展を希望している。</p>		
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
<p>1.生まれつき自己肯定感が低い子どもや乱暴な子どもはいない。子どもの声やあるがままを受け止める姿勢があれば、子どもは笑顔になり本来持っている「生きる力」「人とかかわる意欲」「チャレンジする力」を発揮することができる。その子どもの本来持っている力をわたしたち大人、先生、保護者、ひいては社会が信頼し待つことができるか否かが課題である。</p> <p>2.コロナ禍を経験した子ども達は、さまざまな体験の機会を喪失している。料理やお菓子作り、工作での道具の使い方から泥、草木、水等と遊ぶことを含めた野外での体験活動こそ子どもを生き生きとさせwell-beingな状態へと導く。未知のものや体験に対する恐怖、不安感も失敗も含め幾度もチャレンジする機会があってこそ乗り越えられる。その体験を通してレジリエンスは育まれていくからこそ継続的な活動に意味がある。</p> <p>3.多職種、他機関との連携がこの活動にとって不可欠である。</p>		<p>1.子ども理解、子どもの権利を地域社会全体が学び、積極的にかわることが必要。</p> <p>2.子どもの課題や生きづらさは、子どもや家庭に起因するのではなく、効率や成果、経済を最優先する現代社会のありようの問題であることを意識する必要がある。</p> <p>3.ある意味成熟したこの社会で次に求められるのは、インクルーシブな社会の中で生きる（生活を営む）一人ひとりすべての人のwell-beingであることわたくしたちは考えている。これを達成するためには具体的には福祉とか教育とかの枠組みを超えた取り組み、また異業種、異職種の人々や機関、団体との連携が不可欠である。本事業はさまざまなニーズを抱えた異年齢の子ども達一人ひとりのニーズを満たし、かわりあうことお互いに自己肯定感やレジリエンスを高めあうことを目的とした試みであった。他地域でもこのようなオルタナティブな試みは既に見られる。この試みが広がっていき試みではなく当たり前の活動として根付いた社会こそが望ましいと考えている。</p>		
		■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）		
		この1年間の活動を通して	子どもと家庭、そしてスタッフのwell-beingの向上	を達成しました。
		■ 受益者の具体的な変化（自由記入）		
		<p>不登校傾向の解消 子どもの笑顔が増え、苦手なことにチャレンジするようになった 子どものQOL尺度（生活満足度）の上昇 保護者間の交流の深まり</p>		